



鹿児島日英協会 ニュースレター
The Japan British Society of Kagoshima Newsletter

第8号 No.8 February 2018

会長ごあいさつ ~ニュースレター第8号発行に寄せて~

鹿児島日英協会の活動に関しましては日頃よりご理解、ご協力を賜り心より感謝申し上げます。

昨年度は、メインの事業としてイギリスでの留学経験、旅行等の思い出を、英語又は日本語で綴る「エッセイコンテスト」、英国研究者や鹿児島で活躍している英国出身者を講師にお招きしての青年部主催の「Bimonthly 英国研究会」、更にはポール・マデン駐日英国大使をお招きしての講演会と歓迎レセプションを開催させていただき、多くの会員並びに市民の方々にご参加いただきました。

今年度は、引き続き上述の「エッセイコンテスト」と「Bimonthly 英国研究会」をベースに英国との更なる相互理解、交流・友好親善に取り組んでまいります。

今後とも引き続き、当協会の活動に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

鹿児島日英協会会長 酒瀬川純行（志学館大学人間関係学部・教授）



目 次

- ① 平成29年度第1回理事会、第26回鹿児島日英協会総会・懇親会のご報告・・・P.2
- ② 鹿児島日英協会主催『エッセイコンテスト』優秀賞作品のご紹介・・・P.3-6
- ③ 事務局より・・・P.7
- ④ イギリスひとくちメモ・・・P.8

①平成29年度 第1回理事会、第26回鹿児島日英協会総会・懇親会のご報告

(平成29年度：平成29年10月1日～平成30年9月30日)

日 時 : 平成29年10月21日(土)

会 場 : 鹿児島県医師会館

総会に先立ち理事会が行われ、当協会平成28年度の事業内容報告、収支決算、監査結果ならびに、第2回『エッセイコンテスト』と青年部主催『Bimonthly 英国研究会』の継続開催などを中心とした平成29年度の事業計画案、予算案についてご報告、承認いただきました。そのほか、今後の会員増強を目的とし、より多くの方へ情報の発信を行うことのできるSNS (Facebook/Instagram) 活用についても承認いただきました。(こちらの詳細はP.7をご覧くださいませ。)

また、第26回鹿児島日英協会総会資料や前回のニュースレターにもごさいますが、平成28年度の当協会主催の事業として「エッセイコンテスト」を実施いたしました。その結果3名の方(日本語の部2名・英語の部1名)が優秀賞となり、総会の後半で授賞式を行いました。まず受賞3作品についての講評を酒瀬川純行会長と青年部のDaniel Phillipsが申し上げ、その後受賞者の皆様より英国の思い出などなどについてショートスピーチをいただきました。

引き続き行われた懇親会では、山形屋ベルグ様(山形屋グループ)のご協力のもと、美味しい料理と長澤ワインを楽しみました。今回はエッセイコンテスト受賞者の皆様もご招待させていただき、会員の皆様と楽しいひと時を過ごすこともでき、とても充実した懇親会となりました。

お忙しい中お越しいただいた理事の皆様、ならびに会員の皆様に感謝申し上げます。引き続き、ご協力とご理解のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

なお、次年度の総会は平成30年10月27日(土)を予定しております。多くの会員の皆様にご出席いただけますよう、重ねてお願い申し上げます。

鹿児島日英協会 事務局 鶴田悠里子



② 鹿児島日英協会主催『エッセイコンテスト』優秀賞作品のご紹介

さて、前ページに記載しておりますエッセイコンテストに関しまして、優秀賞となった3作品（日本語の部2名・英語の部1名）をここでご紹介させていただきます。掲載について、快くご承諾をいただきました3名の受賞者様には深く感謝申し上げます。

1.【日本語の部】川島 和子 様

私と英国

「六月三日夜ロンドンでテロ」のニュースを成田のホテルで知り、午後のブリティッシュ・エアウェイズ便で、英国ツアーの一員として私は夫と出発しました。12時間のフライトの後、ヒースロー空港到着。その後バスでブラックバーンのマナーハウスへ深夜到着。マナーハウスは、築700年以上で到着するや否や、私たちの棟の部屋は20分以上停電があり、1日目終了。1666年のロンドン大火を受けて嚴重な防火対策が幾重にも施工されている廊下を通過する行動は、感心するやらびっくりするやらでした。

次の日からイングランド観光がスタート。「嵐が丘」「ジェーンエア」「アグネスグレイ」の作者である「ブロンテ三姉妹」の家や墓があるパリッシュ教会があるハワースを小雨の中見学。

湖水地方では、ウィンダミア湖遊覧を楽しみました。

次の日は、リバプールへ。ビートルズが演奏していたキャバンクラブでは、夫もギターを弾くので嬉しそうに展示物のギターを見ていました。傘も吹き飛ばされそうな悪天候の中タイタニック号の模型のある海洋博物館へ。

その後、ローマ時代まで逆上る古い歴史を持つ城塞都市のチェスターへ。大聖堂や、白と黒を基調としたチューダー様式の木組みの二階建てアーケードのガロウズ。城壁の3.2Kmを歩いたのもいい思い出です。

その後ウェルズにある世界遺産のコンウィ城へ。イギリスで最も小さな家に、1ポンド払って入室した事もおもしろかったです。

シェイクスピアの生家や彼の家族の墓があるホーリートリニティ教会があるストラットフォードアポンエイボンやバラの花で有名なヒドコートマナーガーデンやバイブリー、ボートンオンザウォーターのあるコッツウォルズ地方へ。どれもこれも素晴らしく、特に私が感動したのは、昔からの自然を残すために、イギリス国民の5%にあたる300万人の人々がナショナルトラストの会員との事。そのおかげで私達観光客は、懐かしい風景や建物、かわいらしい羊達を見る事が出来るのだと感謝の念でいっぱいになりました。同じ島国である日本では、古い建物を保存する事が少ないしすぐ壊しては建て替える風潮が多い中、流石歴史と伝統の国英国だと感服しました。英国ではバスドライバーは、150分走ったら45分の休憩を必ず取らなくてはいけない法律があるのに、日本では、240分走ったら30分の休憩との事。英国での働き方は、人を大切にしている事もわかりました。

12世紀にローマ法皇より特許権を与えられた英国最古の学園都市、オックスフォードには45のカレッジがあるそうです。クライストチャーチやマートンカレッジ、セントメアリー教会など駆け足見学でしたので又ゆっくり訪れたいです。

旅の最終地はロンドン。大英博物館やナショナルギャラリーは、専門のガイドの詳しい説明つきで大満足。国会議事堂、バッキンガム宮殿、ウェストミンスター寺院etc…。自由行動ではテムズ川下りに参加。川べりから見たビッグアイ。タワーブリッジ（跳ね橋）は、今も橋げたを一日

数回可動させている。たまたま舟の上から見られてラッキーでした。11世紀にウィリアム1世が、テムズ川の岸辺に要塞として築いたロンドン塔。宮殿や監獄、処刑場となった事を本で読んで一度見てみたいと思っていたので念願かなって大満足でした。地下鉄やダブルデッカーにも乗り、ロンドンを大満喫できました。イギリスがテロや大火に見舞われることなく、歴史や伝統を世界の人々へ伝えていってくれる事を心から願っています。感謝。感謝。

・テロ続くイギリスの旅無事終えて

我がベッドにて大の字に寝る。

・エコの国買い物たび店員に

袋いるかとたづねられたり。



(優秀賞受賞の川島様)

2.【日本語の部】西園 圭子 様

私と英国

もう二十数年も前の話だ。私が英国に降り立ったのは。六年勤めた会社を退職して次の夢、目標に向かって歩き出そうと旅立った憧れの国。日本は丁度ゴールデンウィークに入る前の新緑の季節であった。

私が留学先に選んだのはホブ（HOVE）。ロンドンから南へ電車で一時間余りの港町、ブライトン郊外だ。そこで三ヶ月ホームステイしながら英語学校に通った。

家は学校の近くのテラス・ハウスと呼ばれる英国式長屋で、家主は四十代の再婚カップル、ジョンとアンジー。ジョンはブライトンの劇場に勤務する陽気な男性だ。度々ジョークを言って笑わせてくれるのだが、難解で速いコックニー英語には悩まされたものだ。

アンジーはパート勤めの主婦で一目クールだが温厚な女性。私の拙い英語もよく聞いてくれて、的確にアドバイスしてくれた。

英国人は、あまり料理に頓着しない、というのが一般的な見方だそうだが、幸い彼女は料理上手であった。ここの留学生が過ごす最後の夜は、スペシャル・ディナーを振る舞ってくれるのだ

が、私があの日食べたマッシュポテト添えのロースト・ビーフとビーフシチューは、心に沁みる格別な味であった。

学校には同じ家のもう一人の下宿人—初めの二ヶ月はスイス人、残り一ヶ月はスペイン人のいずれも二十歳の女の子と一緒に通学した。町の人たちとも顔を合わせると、「ハイ、ディア」と気さくに挨拶を交わせる様になっていた。学校は小規模で、クラスも六~八人の少人数。様々な国籍の生徒がいたが、スイス人が一番多く、次が日本人。私と同じクラスメートはこの二つの国の外にドイツ人とアルゼンチン人がいた。スイスの友人達は真面目だが、行動力があって外国語を習得するのが得意。海が非常にめずらしいらしく、授業が終わると「ビーチ」と叫んで海岸に駆け出していた。美しいブライトンの海岸、パレス・ピアは私も大好きだ。そこは昔懐かしの映画、「小さな恋のメロディー」のロケ地にもなった場所である。

この映画、日本ではとても人気があったが意外にも英国人にはあまり知られていない。ある時私がこのストーリーを授業で紹介し、日本人のクラスメートと盛り上がっていると担任のエレン先生が目をまん丸くして笑顔で「まあ、あなた達は何てロマンチックなの?!日本人がこんなにロマンチストとは知らなかった。」と驚かれた。それからこんな話も。「イギリス人は他の欧州人、特にラテン系の人達からは冷たいと思われている。」そう言えば、よほど親しい間柄でないあまりハグとかしないし、感情的にならず冷静なイメージがある。「でも私達は決して冷たい訳じゃない。どうやって感情を表したらいいかわからないの。」と。同世代の彼女の気持ちはストレートに伝わってきた。

欧州人同士はよく議論していた。私ももっと色々話したかったが、英語力が足りなくて自信もなく情けない思いをした。

それでももっと地元の人と知り合いになろうと思いついたのが「ガールスカウト—こちらではガールガイドと言う—」。近くの団の指導者の方とコンタクトをとり、集会やキャンプを見学させて頂いた。長年この活動を続けてきて本当に良かった。帰国後も彼女とは数年間文通が続いた。

滞在中何度か訪れたロンドンは、ワクワクする大都会。大好きなミュージカルを観る事が出来た。カンタベリーでは中世の騎士に会える様な気がしたし、湖水地方は絵本の中に居る様だった。

私にとっての英国は、たった三ヶ月であったが、五十代半ばになっても決して色褪せる事のない思い出の詰まった場所である。

ここで出会った人々が平和で幸せに暮らしている事を心から祈るばかりである。



(優秀賞受賞の西園様の代理で総会に出席して下さった、小正様)

3. 【英語の部】 佐久間 圭子 様

The U.K was the Country

It was only 6 years ago when I became really fascinated by British scenery and culture firsthand. The people, culture, buildings and language filled me with wonder and allowed me to become who I am today.

I began learning English when I was only 8 years old. These days it is very common in Japan to learn English at this age, but more than 10 years ago it was still quite rare. At that time, the movie “Harry Potter” was released in Japan, and despite being a fantasy film, it enabled me to witness foreign peoples’ mannerisms, and appreciate different architecture. 5 years after watching the movie, I realized that the places in the movie were British, and ever since that time I became determined to visit and improve my English skills.

When I was a university student in 2011, I finally had the opportunity to visit the UK. I was so nervous when I spoke to British people, and was disappointed in my own English skills because I could not understand what they were saying. However, the views and caring nature of the people helped me. The 200-300 year old, traditional buildings allowed me to feel appreciation for the history of the people. In Japan, we have lots of earthquakes, so I cannot imagine such old buildings and how they would remain safe. British buildings made me imagine the brilliant scenery of the past, and British people were so patient with me when I couldn’t explain my feelings in detail. I really valued them for their hospitality.

Now, I’d like to share the amazing memory of the time I met a person at Piccadilly Circus in London. At that time, my friend from Kumamoto and I were spending about 10 days in the UK for our graduation trip in 2014. We walked around the city center with my British friend whom we had met in Oxford in 2011. He wanted to eat some Japanese food so we went to a Japanese restaurant we found. Lots of British people enjoyed the meals at the restaurant called Taro. I was surprised while looking at the menu. The menu said that the owner was from Yatsushiro, Kumamoto. We were really happy to learn this, and decided to ask the owner why he moved here and how his life was. He came to us and looked very happy to see us as well. He came to London when he was 26 and could not speak any English at all; however he wanted to change his life for the better. From then, he made up his mind to open his own restaurant in London and make a huge effort to study cooking and speak in English. Now he runs two popular restaurants. At the time, my friend and I were wondering about our future because we had not decided what our future jobs would be, so we were impressed by his story. I was moved and I felt like I could do anything. If I could visit there one more time, I would like to tell him that I became an English teacher. I hope he will be pleased with me. I cannot forget the taste of the teriyaki chicken I ate there.

I also met a woman working in a village in Aberdeen, Scotland. Her name is Akiko. She was helping elderly people who need special care in the village. The village is also unique, because it was made by people who need special care. They help each other, share their houses, and run their own bread shop and café restaurant in the village. I really liked the atmosphere of the village because they always smiled at me and were friendly. Akiko and other people volunteered there. She had graduated from Aberdeen graduate school and decided to stay there forever. I was really impressed by her way of life. We were talking about our future while watching the sunset. I cannot forget that time.

My memories of the UK gave me lots of experiences and made me think of my future. I am still studying English, and want to teach English to Japanese children using my various experiences. I want students to make foreign friends using their English. I was changed by meeting British people, and I was changed by visiting the UK. Of course, an experience in any country can change you, but for me, it was the UK. The UK made me what I am today.



(優秀賞受賞の佐久間様)

③ 事務局より

(1) Facebook 開設

当協会に青年部が平成26年に発足し、少しずつではありますが若い新会員の加入も増えております。

P.2でも少しお知らせいたしましたが、10月に行われました理事会にて、今後の当協会主催イベントのお知らせや活動報告の発信媒体としてSNSを活用していくことをご承認いただきました。さっそく平成29年11月にFacebookページを作成いたしました。昨年度のイベントのBimonthly 英国研究会など、少しずつ更新しておりますのでぜひアクセスしてみてください。

【Facebook】ページ名：The Japan British Society of Kagoshima Youth Division

当協会への入会を希望されている方がいらっしゃいましたら、事務局までお知らせください。

(2) 第2回エッセイコンテスト

昨年度に引き続き本年度も協会主催で、日本語または英語による英国での思い出やイギリスについての思いなどをテーマに「第2回エッセイコンテスト」を開催する見込みです。会員様からのご応募も歓迎でございますので、イギリスでの体験談がある方、イギリスへ熱い思いがある方はぜひご応募ください。(詳細は別途お知らせいたします。)

④ イギリスひとくちメモ

～英国式朝食 (English breakfast)～



ボリュームたっぷりの English breakfast

メインプレートにベーコン、ソーセージ、目玉焼き又はスクランブルドエッグ、ベイクトビーンズ、ベイクトトマト、それにマッシュルーム等、サイドプレートにトースト又は小型のロールパンにマーマレードやジャム、オレンジやアップル、パイナップル等のフルーツを摂る豪華な朝食。

あわせてオレンジジュース等の飲み物、更には好みでティー又はコーヒーを摂る。

作家サマーセット・モームが“To eat well in England you should have breakfast three times a day.”（英国でよい食事をしようと思うなら、朝食を三度とればいい。）と言ったのにはなるほど首肯ける。英国訪問、滞在中には是非ともトライしていただきたい料理である。

(写真・文責：酒瀬川純行)

～ 今後の予定 ～

「平成30年度 理事会・総会・講演会・懇親会」

開催日：2018年10月27日（土）予定

於：鹿児島サンロイヤルホテル

（鹿児島市与次郎 1-8-10）

【鹿児島日英協会 事務局所在地】

〒890-8504

鹿児島市紫原1丁目59-1（志学館大学内）

TEL: 099-812-8501 Fax: 099-257-0308

Email: jbskinfo@jbsk.jp

jbskagoshima@yahoo.co.jp

URL: <http://jbsk.jp/>